宍粟郷土研究会報
No.16
38. 6. 1
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話750番

山崎藩主池田政元の臨終（二）

島田　清

一

江戸時代の山崎藩は、池田、松平家の輝澄によつて興され、松井松平家の康映によつてその基礎を固められた。そして再び入部した池田松平家の恒元の代に大いに治績をあげたが、その後、三代で後が絶え、暫く公領となつていた。しかし、延宝七年（一六七九）再び藩地となり、本多忠英が藩主に任ぜられ、爾後、明治維新まで九代二四〇年間続いた。石高は、輝澄の時代が、最初五万石で、後に六万一千石、康映の時代が五万石、恒元以下の三代では三万石、本多家時代一万石と、漸減しているが、この中で、名君と呼ばれる藩主は、大体、五人である。一人は、三代目の松平康映、一人は三代目の松平恒元、一人は六代目の本多忠英、一人は一〇代目の本多忠可、最後の一人は十三代目の本多忠隣である。資料が充分でないため、一人一人について詳細に述べることはできないが、今後、できるだけ資料を捜索し、整理して、それぞれの事績を明らかにする必要があろうと思う。

本稿で述べようという池田政元は、いうまでもなく、三代恒元の嫡子で、寛文一一年（一六七一）父のあとを継いで第四代の山崎藩主となつた人である。年令は、このとき漸く一八才になつたばかりで、青年藩主として大いに緊張し、万事に努力したに違いない。しかし、延宝四年（一六七六）病にかかり、翌五年一月八日、二三才の若さで遂に逝去してしまつた。未だ、治績というほどのものをあげるいとまもなく、やつと、人生の表街道に乗り出したところで仆れたといつた感じの政元は、ほんとうに気の毒であるといわねばならぬ。後年のことであるが、このとき迎えた養子の数馬がまた夭折し、遂に池田家断絶という憂き目を見るのも、もとは、この政元の若死に原因しているといつてもさしつかえない。それだけに、同藩としては残念なことであつたろうし、あきらめきれぬものがあつたに違いないが、当時、千石の録を食み、家老職をつとめていた淵本弥兵衛保道が書き残した日誌（「宍粟日誌」と呼ばれている）には、政元病死前後の情態が詳しく記されている。この日誌は、山崎地方ではあまり知られていない史料であり、且つ、大名の病死と、それに伴つてどんな問題が起るかということを具体的に示す史料として興味があると思うので、

次に、その部分を掲げてみよう。

二

延宝五年丁巳

正月八日　天気吉

一、朝六ツ半に、政元公御遠行

（註）「御遠行」というのは「御他界」と同じく逝去したことで、これは、江戸浅草の山崎藩主松平家上屋敷における出来事である。

旧冬霜月二日より、御足御こぶら御痛。佐川理安薬、同十九日まで被召上。御同遍に付、同廿日より小野道英薬被召上。其節は、御頭痛も強く有之候。然処に、道英薬にて御頭痛は止み、御足へ少御腫気見え申候。廿五日よりは、御みつい少御腫気有之、御足にも御腫気少有之。御足のこぶら御痛、御ふみたて難成由。廿六日より十二月九日まで、大井能登守殿医者、大谷宜庵薬被召上、御腫気も引、御足の痛も止候へば、御足に御覚無之様に成、御立居不自由、御食事も少し宛減申、御小用も上り物より少づつ劣り申候。然る処に、九日に御むかつきの心出来に付、安藤対馬守殿御医者牧隆元と申医者薬、十日より御服用。御むかつきもやみ、少御快御座候処に、それより御腫気も次第に引、御心持も能様に御座候へ共、又、次第に御手足彌御不自由にて、御足の腫気は引、御食事次第次第に減、御死去十四、五日前より、割の粥水ぞうすゐなど、一日に五、六十目づつ被召上候。御菜もりくち大根斗。魚肉は廿四、五日前より不被召上候。味噌気も同前、御気色能様に御見え申候も次第次第に御大病に成候に付、道英、理安に申渡し、存寄可書付の旨、申聞候。廿九日の朝、杉山検校参、御腹伺、御煩、十にして八、九は大切に候。然共、初より少能と存所にて、同前に候。然上は、唯々、養生の節と存候由、申候。扨、御腹中の様子、又、御療治のいき様、相尋候へば、理安申分と一つに参候故、理安薬、廿九日の晩より被召上候。御気色能、御食も進み、御小用も通じ申候。三日より杉山検校針立申候。それより七日迄、毎日御針致し、次第次第に御気色重り、七日の夜は杉山検校も御卒候迄、付居申候。豫州様の針立、用伯、用中、替り替り毎日相詰申候。一、井上玄徹、井関玄説、伴宗悦、平賀玄唯、御脈見被申候。何も大病の由被申候。井関玄説は、旧冬より被申候。玄徹は、初より、薬用の事、成間敷由被申候。伴宗悦、八日の朝、御奉公とて被参候得共、最早、入不申候。

（註）右の文中に見える大井能登守は、旗本、安藤対馬守は上州高崎藩の城主。また、豫州様は、本家、備前岡山の松平綱政のことで、政元の父、

恒元の兄である光政の嫡子にあたる。なお、政元はのちに政周と改名している。

上記の日誌によつて、政元の病状と処置とをわかりやすく、表示すると、次の通りである。

延宝四年

一一月二日　足のこぶらが痛み、藩医の佐川理安が投薬した。（十九日まで）

一一月二〇日　頭痛が強くなつたので、藩医小野道英の投薬を服用した。（二五日まで）その結果、頭痛はやんだが、足に腫気が出て来た。そのうえ、二五日になると、みついに少し腫気が出、足にも腫気があらわれたほか、足のこぶらが再び痛み出し、足でふまえて立つということが困難となつた。

一一月二六日　旗本、大井能登守抱え医者、大谷宜庵を召寄せ、新しい診断と投薬を依頼した。（この薬は、一二月九日まで服用した。）

宜庵の薬を飲むと、腫気も引き、足の痛みもなくなつたが、今度は、足の感覚が失われ、立居振舞が大変不自由になつた。それと同時に、食事の量も少しづつ減少し、小便も少くなつた。そして一二月九日になり、急にむかつき（吐気）を催した。

一一月一〇日　山崎藩邸では驚いて、上州高崎城主安藤対馬守の典医、牧隆元を招き、診察・投薬させたところ、むかつきもやみ、少しはこころよくなつたし、腫気も、しだいに引いて心持もよいように見受けられた。しかし、日がたつと、また、次第に手足が不自由になり、足の腫気は引いたけれども、食事がだんだん減つていつた。そして一三日ごろよりは魚肉も食べられず、味噌気もやめられるようになり、二三日ごろよりは、割の粥水ぞうすいなどを一日、五、六十匁づつ食べる程度、お菜も「りくち大根」ばかりを召上がられるありさまとなつた。これで、病状のむつかしいことが誰の目にもはつきりわかつて来た。そのため、家老の淵本保道は、大体の見透しを書き付けて出すよう、佐川理安、小野道英に命じた。

文房具・紙製品・雑誌
志水成文堂
山崎町本町通・TEL 547

一二月二九日　朝、幕府御拘の杉山検校が来邸し、診察したが、見込では、十中の八、九は駄目だということであつた。そして、はじめよりは少しよいと思えるところもあるが、とにかく、よい目が見えないので、専ら、養生を大切にするように、との話であつた。そこで、保道は、病勢や、それに対する処置について、検校の見立、意見を聞いたところ、さきに、佐川理安が申述べたところと同じであつたので、この日の晩から再び理安の薬をさしあげることとした。これで、気分もよくなつたように見え、食事も進み、小用（小便）も通じるようになつた。

延宝五年

一月三日　杉山検校が針立をおこなつた。そして、これより毎日、七日まで針を立てたが、その間、しだいしだいに気分が重り、衰弱していつた。本家である備前岡山藩主松平（池田）綱政御抱の針立用伯、用中も、この間にはかわるがわる詰めていた。

一月八日　杉山検校は、七日夜、危険とみて、一晩中詰めていたが、見込みのとおり、八日朝、政元は遂に永眠した。

政元が病臥中、診察した医師は、右の佐川理安、小野道英、大谷宜庵、牧隆元のほかに、井上玄徹、井関玄説、伴宗悦、平賀玄唯などがあつたが、いずれも、これは大病であるとの見立てであつた。殊に、井関玄説は、旧冬よりこのことを申述べていたし、元徹は、薬を用いても駄目であると言明していた。伴宗悦は、八日朝、「御奉公」といつて来邸したが既に、逝去したことを聞いて入室しなかつた。

以上が、延宝四年一一月はじめより同五年一月八日まで約二カ月間に亘る政元の病状とその処置である。それより以前のことがわからないので、病気の全貌が、はつきりしないけれども、後に述べるごとく、政元は半年ほど前、既に遺言状を書き残しているので、かなり早くから、こうしたことに対する用意をしていたといつてよかろう。

私は医者でないため、右に記された病状をみても、的確な病名がわからないが、循環器系の疾患がもとではないか

と思う。まだ、二三才の壮才で、こんな病気になるというのは、先天的に病弱であつたのではないかと考えられるが、せつかく大名の家に生れながら：：しかも名君といわれる父（恒元）や伯父（光政）をもつていながら：：：気の毒なことであつたと思う。

（未完）

往古の郷土

入江静夫

古い時代の事を石器時代、縄文式文化期と申され、次の時代の事を金石併用時代、弥生式文化期と申され、大和時代、古墳文化期迄の事は記録に郷土関係事項が余り残つて居りません。縄文式土器は、二千五・六百年前から三、四千年前の時代で、何か郷土に残つていないかと探したくなります。弥生式時代には石器の外、金属器を使うようになり、青銅器である銅鐸がこの時代の遺物と聞きます。弥生式土器時代のはじめ頃は国家がなかつたが、次第に私有財産制度が発達して豪族ができ、これが併合統一されて国家として発展して行つたのが大和時代で、千七百年程前で、弥生式土器もほぼこの時代で終つている。この時代に郷土はどうなつていたかと考えます。

矢原の古墳より弥生式土器、戸原の古墳から素焼の土器が出て居ります。銅鐸は最近では山崎町青木の梶間の山麓より出て居り、須賀や三日月町の本郷、夢前町の神の種からも銅鐸が出て居ります。古墳時代、大和時代と考えられる古墳は、山崎町内でも、横須古墳、加生古墳、須賀古墳、矢原古墳、野々上古墳、五十波古墳、戸原古墳があります。一宮町の伊和神社には、素戔嗚尊の子大国主命、別名大己貴命が伊和の里に居を構えた伊和大神が祭つてある。別名国造りの大神占国の神とも伝えられている。素戔嗚命の子、大国主命、孫伊勢都比古、伊勢津比売は、郷土の神社の祭神として祭られている。

素戔嗚命を祭神として祭られる神社は、山崎町内で、上ノの桓武伊和神社、与位の与位神社、母栖の山神社、与位の国司神社、土万の松尾神社、青木の若西神社、横須の須賀神社、下比地の建速神社、神谷の岡神社、上牧谷の住吉神社、須賀沢の石作神社があり、読み方が同じの須佐之男命、須戔男命、武速須戔嗚命が祭神である神社も相当数あり、大国主命（別名大己貴命）を祭つている神社は須賀の箪纍神社、上ノの岩上神社、生谷の岩淵神社、田井の大牧神社、与位の国司神社等があります。大国主命の子伊勢都比古及び伊勢津比売を祭つてある。揖保郡伊勢村の伊勢野等があり、郷土と住民と神社のつながりが出来ている。

神功皇后が三韓征伐の帰途開鉱されたとも伝えられる千種鉄と往古の郷土が発展して今日に至つている事が知られる。これ等の関係を一歩深く、亦広く研究が出来れば、郷土の発展経過が時代の移り変りと共に変化を知る事が出来

ると考えます。

亦山崎の地質方面から考えましても、塩田の化石、生谷の温泉、小茅野、野々隅、与位の奥の火山灰の様な土、断層のある青木から葛根等、住民と農耕と生活が往古より関係していることが考えられます。

興国寺と木庵禅師

杉山　よしあき

興国寺と木庵禅師という題でお話をさせて頂きます。それで、はじめに、興国寺の史伝、次に木庵禅師についてお話します。

山崎町上寺に興国寺という禅宗の臨済宗に属するお寺があります。この興国寺は、今から三百二十年程以前の、正保年間に山崎の領主でありました松平康映が創建したお寺で、長安寺と号していました。松平康映は、もと泉州の岸和田の城主でありましたが、寛永十七年より慶安二年まで山崎城の領主でありました。英明で、人心をよく修め、城の門や木戸を完成したり、士族の屋敷をとゝのえたりした君主で、所領は五万石でありました。けれど松平康映は慶安二年に石見の国浜田に転封になりましたので、一時、長安寺は廃寺となりました。

松平康映の次に、山崎城主となつたのは池田備後守恒元であります。恒元は岡山城主池田光政の弟で、明君の聞こえ高く、慶安二年より寛文十一年まで、三十二年間、山崎藩の領主でありまして、所領は三万石でありました。恒元が、亡父の利隆公の菩提のために、長安寺の跡にお寺を建立したのが興国寺であります。利隆公の法号の興国院殿を取つて興国寺と名づけたのであります。そして恒元は、郡内河東村の内、三谷村の田を、永久一百石を興国寺へ寄進したのであります。ところが、寛文十一年に池田備後守恒元は病死、その後をついだ、子の政周は早逝、養子の恒行も夭折したので、山崎城の池田家は三世で断絶しました。従つて菩提寺の興国寺も運命を共にしたのであります。

延宝七年に、大和の国郡山城の本多政貞が山崎城に入り一萬石をあたえられました。本多政貞の名を改めて本多忠英と言います。本多忠英は、前藩主の遺徳を尊び、興国寺を祈願所として、境内山林を免租しました。

興国寺は、元録十年の六月に、不幸にも火災にあい、諸

創業百五十年の姿を一新しました

ドラッグストアー

ひがしね
山崎町福原町 TEL 109

堂宇が悉く灰燼に帰したのであります。現在の建物は、第四世住職の台道和尚が普請再建したものであります。明治六年の廃藩置県までは、備前の本家の池田家より興国寺へ毎年、一百石宛の寄進がありました。

皆さんが、興国寺へ参詣されますと、山門の二階に「泰安山」という額がかけてあります。注意して御覧になりますと、「黄檗木庵書」とあります。木庵と言うお方は、禅宗では大そう有名な偉いお坊さんであります。日本の国で生れられたお方ではなく、中国の泉州晉江の人でありまして、木庵禅師の姓は呉氏で、名は性瑫、木庵はその号であります。

木庵禅師は、十九才の時に、中国の開元寺の印明和尚について出家され、二十五才の時に禅宗に入られて、後に、隠元禅師の門に入られました。木庵禅師は、明歴元年に、師の隠元禅師と共に、将軍家綱に招かれて、中国より長崎に来られ、ついで摂津の国の富田の普門寺に到られました。

木庵禅師は、寛文年間に、師の隠元禅師を助けて、山城の国の宇治郡大和田（現在の、東宇治町字五箇庄。京阪電鉄宇治線黄檗駅東約〇、二KM）に黄檗山萬福寺を開造されました。そして、五十四才の時、寛文四年に、黄檗山萬福寺の第二代の法席を継がれた高僧であります。木庵禅師の著書には『広録』三十巻。『続録』七巻。がありまして貞享元年正月に七十四才で入寂されました。

さて、山崎町上寺の興国寺に、この木庵禅師のお書になった「泰安山」という額がかゝっているのでありますが、それで皆さんと共に考えてみたいのは、木庵禅師は山崎へお越しになられたのであろうか？、木庵禅師が日本の長崎へ上陸されてから、黄檗山萬福寺の法席を継がれたころは丁度、山崎城主池田備後守恒元の時代であるから、備後守が木庵禅師を招いたのか、あるいは木庵禅師に帰依していたのか、または、木庵禅師を師範と仰ぐ和尚が当時の興国寺の住持であつたので、額を書いてもらつたのであろうか？種々の疑問が残ります。

もしも、郷土会の会員諸賢の皆さんの中に、木庵禅師と山崎についての史上の資料や伝説などを御存知のお方がございましたらお知らせ下さい。これらの点について、木庵禅師と、山崎の関係が判明して行きますと、山崎町の文化史を研究しますのに大きな参考になると思うのでございます。ともかくも、高僧木庵禅師の筆蹟が山崎町にありますことはうれしいことであります。

トトパイ一本
元気百倍
乳酸菌特殊酵素飲料
トトパイ
産業株式会社
山崎営業所 童野営業所 山崎工場
日本トトパイ株式会社
本社 東京都港区芝新橋五丁目
工場 千葉県柏市柏神町東大作
営業所 東京 大阪 名古屋 広島 山口 福岡 高松

衣坂異聞

福井託二

もう梅雨に入つたかと思う長雨続きのある日の夕方、水源地のYさんが、珍らしくヒョツコリ見えて、衣坂のお地蔵さんの本体らしい石仏があるから一ぺん見ようじゃないかと誘われて、ショボつく雨の中を出かけた。こんな筈ではないがと開けにくい本堂の扉をドライバーと金槌でこじあけて、その石仏を見せて貰つた。懐中電燈の鈍い光で照らし出された刻字を読むと、凝灰岩石面に浮き彫りされた地蔵尊の左上に天〇五年八月日と刻字されて、その下の地主名もうすく消耗して堂内の暗さも暗し判読しがたい。最初の天は判るが次ぎのYさんの云うところの正がハツキリしない。天正五年から約四十五年前の天文の文でもない。以後の天和、天明、天保の何れでもない。どうしても正と彫つてあるのかも知れない。石仏の右側にこれが本体だろうと思われる鏡が置かれてあるが、これも作法が新しい様に思われる。若し天正五年であるなら当時或る地主が死んだ、肉親の供養のために、すでに露座して在わす本尊の横にでも安置したものであろうとの私見であるが、そうするとこの石仏より以前に何か本尊らしいものが在つた筈ではないかと考えるのである。この点大方の御見識と御教示をお願いしたいものである。当時羽柴秀吉の中国攻めの初段階で、この宍粟の僻地も人心動揺が相当であつたと思う。天正五年とすればこの石仏が安置されて早くも三年目で長氷落城の悲運に見舞われている。それからこの石仏は、高さ五十センチ、幅二十五センチ程で、下方から十五センチ位の処で横一文字に割れている。これには余談がある。明治初年頃今宿に住んでいた一人の元気者が、毎晩目と鼻の地蔵谷の巷灯に道楽通い。或る朝衣坂の中程の窪みに北向きに祠つてあるこの石仏を上首尾の別れて帰るさに抹香臭いは縁起でもないと、肩にひつかついで坂下の小川に投げ込んだ。それ以来家運不首尾つゞきで大罰が当つたそうである。近所の奇特者が勿体ないと拾いあげたら今のように二つに割れていたと云う。この石仏が今の衣坂でなく、五十米程北寄りの坂通に南立北面して立つていたので、当時俗に北向き地蔵と呼んでいたとの事である。この名前は日本国中どこにでもある名称でもある。又現在の衣坂は最近の改正道路で以前はもつと北の今ガソリンスタンドが出来てる手前を西へ行き、小川を越して坂を上り大神宮前に出る小径が昔の往来であつて、今宿は勿論、河東の人達も出石割しをこえて山崎に入つたのである。

衣坂の名の起りも面白く、明治初年頃御名村西光寺に有

蒲団 毛布・蚊帳・マットレス
ふとん綿の打直し
是非当店に御用命下さい
とりこしや製綿部
山崎町西町
TEL. 6107

名なお相撲坊さんがあつた。この相撲好きの院主さんが暇さえあれば、馬にのつて今は昔水源地あたりに住んでいた地相撲取りの某に業比べにやつて来て、その都度決まつたように坂の登り口にあつた大きな青桐の枝に、自分のぬいだ衣を掛けたので、誰云うとなく衣坂と呼ぶようになつた由である。石割れて衣坂の由来をYさんから面白く聞きながら、いずれ又梅雨晴れの良い天気にもう一度よく見直そうとまだショボつく雨の堂前を分れた。

郷土会春季見学

尾の道旅行記

五月十二日出発の朝は、夜来の雨止まずしとしとと降つていた。その中を熱心なる会員の方々は五時三十分カツチリに、神姫停留所前に集まつて下さつて、三台の観光バスに百七十人が分乗して雨の中を進発した。竜野を経て第二号国道に出ると快適のドライブです。かくてガイド嬢の説明など聞きつゝ岡山県に入ると雨稍小降りとなり、空の雲も切れ目が見えて来て一同愁眉を開く。福山城を車窓に望み見てから十時に

『鞆の福禅寺』に着く。早速観汐楼を開放してもらい、襖も障子も取除きて長老自ら懇切なる説明を聞く。正徳年間朝鮮の使節李邦が「日東第一景勝」と賞賛した弁天島や仙酔島を望む眺望は絶景であつた。折から満船飾とも云うべき鯛網見物の舟が、音楽入りで出港する風景も見られ一同大満足でした。

それから福山へ戻り、尾の道に直行し、山に登りて千光寺山荘に着したのは正午。天候も回復して日光を見る山荘は、山の中腹にあつて蒙華な建物であり、用意の大広間に一行全員が落着いて昼飯とした。山荘では温泉もあつた。ベランダからの眺望はすばらしく向島の日立造船所など眼の下であつた。

『千光寺』を包む山一帯は公園となつて居て、その設備も十分出来て居る。山は至る所奇岩怪石が多く、大同年間多田満仲の建立と伝えらるゝ本堂のあたり、累々たる巨岩を利用し、背景として仏堂があり鐘楼がある。句碑も多く竹田の座紅碑、徳富蘇峰の詩碑もあつた。何所からでも近々にある島と青い美しい海とが眼の下に展開して居る風景こそ、山陽先生の山紫水明指観にありの詩句を思い出さるゝのであります。尾の道駅にて暫く休憩、四国通いと、耕三寺行の乗船場風景なども視察して車は帰路につく。町の東端に車を止めて稍急なる石段を昇ると、真言宗の大本山である

『浄土寺』に着く。この寺は推古朝聖徳太子の開基と云われ、地方で稀な古刹で、二重塔本堂等国宝が中々に多い。境内清く広く海の眺めも中々によろしい。

かくて我等の車は元の国道を戻つて、午后五時頃に金光

教本部の前で停車して余拝した。三年前に竣工した大斎殿は鉄筋洋館で堂々たる豪壮な建築であつた。本殿社務所はまだ旧館であるが広くて大きい。こゝを辞して一路帰路につく。車中は各々お得意の芸能を発揮して下さつて愉快に極めて楽しく、山崎着は九時三十分であつた。

郷土資料解説（8）

安井俊二

宍粟郡西谷村沿革誌

昭和十三年五月十日西谷村役場発行。百二十六頁、菊版巻頭に西谷村全図をつけ、市制町村制上諭という明治二十一年四月十七日付の公布文を掲げているのは珍らしい。即ち、自治制発布五十周年記念に、同村の五十年の沿革概要を記したものである。いまは波賀町として奥谷村を合併しているが、明治、大正時代の西谷村を知る好資料である。村長、助役、収入役をはじめ吏員や区長までも、その就任退職年月日を記載しているめんみつさである。当時の村長は、岸根寛左ヱ門氏。

総町中地詰帳

八幡神社所蔵の旧山崎町内の屋敷の表口、裏口、竪を何間何尺と表示して、個人個人の所有を明瞭にしている。昔の土地台帳兼登記簿といつたものであろう。元禄十二年、宝永年間、天明元年、文化十四年と書き改められていることは、奥書に明かである。この帳面も相当に張紙が多くしてあるのは、次々と権利の移動があつて所有者などの交替を物語つている。表紙の方に明治四年の年号が入つているのは、その当時迄の移動が記入してあると推定すべきである。町名は東新町、本町、山田町、門前町、福原町（東之町、西之町）伊沢町（伊沢口）北魚町、紺屋町、富土野町（口ノ丁、中ノ丁、奥ノ町）寺町、寺町片原町、出水町となつており、所有者の名簿は殆んどが、屋号で何々屋何兵衛である。旧屋号の研究には欠くことの出来ない資料である。

この資料に基いて、各町との縮図を作成しようと努力した篤志家があつたが、完成の域に達しなかつたらしい。その記載例は

南側

一、表口六間　裏同　竪拾八間半

今市屋弥太郎

というのが、東新町のトップである。

この帳面は、藩が税金を取り立てる為に年寄から明細書を差出させた副本で、年がたつと多少の増減ができるのでまた書き改めるということになつたもの。宝永二年の奥書には、元祿十七年三月十日福原町一番町から出火、福原町全部、山田町東端より南側米屋儀兵ェ屋敷まで、北側丹波屋理右ェ門借家まで、北魚町東より南側魚屋助右ェ門家まで、北側魚屋六郎兵ェ家まで、寺町、紺屋町、茶町、富士野町全部焼失した旨の記載あり。町奉行出張して、所謂区画整理して屋敷替などを命じ、道路を新設して、伊沢町、出水町と名付け富士野町と区別、これで町数が十一町になつたなどと記載している。

俳諧三音鳥

みつねとりと呼ぶ。寛政四年の春、青蓮寺の俳僧四睡庵素練が刊行した俳書。序文に「鶯のはつ音には去年の物うきを忘れ、詩に作り歌に詠れて梅に宿かる風流を清氏も誉給ふ、雲雀は、ほのくらきより終日に啼きくらせば、世渡る業のいとまなきを麦の仮寝のたのしきやはあらん。春の雁のやがて古巣帰らんと朧々なる日影に一声ふたこゑ落したるは、あまの苫屋も心うく妻よぶ賤が耳にも悲しましてフ雅はここの淋しみにとどまりぬ。この三鳥の三声におのづから其の姿わかれはみつね鳥となづく云々」とあるので分明である。連歌と俳句が半々位に掲載。散文は、序文と和合の聯、仙風舎の記があり、俳句は姫路はじめ西播地方と当地俳人の句を収録している。素練の伝記の詳らかでないのは残念であるが蕉門の正統をもつて自認し、地方俳人として、江戸時代のピカ一であつたことは間違いない。

紹介

『新潮十年』 山崎町和田方新潮会では、昨年十一月に十周年記念式典を行つたが、記念誌として本年一月発刊。本町出身の生沢朗の表紙絵に、嘉治隆一、朝倉斯道ら八人の有名人の寄稿をえて、会員随想など二十九頁外四頁の写真版入り。前野四郎会長以下人の和をもつて、本郡の文化活動に功献した功績は周知のとおりである。この十年を一区切りとして、更に発展さるることを期待する。

『地理歴史研究第一〇号』 山崎高等学校地理歴史班では、今春その成果を録した第十号を発行。二十四頁。表紙に青木の舞台図、内容は、境界論争の研究と民家の調査が主で、共同研究の成果を充分に発揮してある。郡内の代表的民家数戸の平面図など多数搜入され、民俗的調査も加味して興味が深い。

会員名簿（14）

北魚町　石田　広吉
横須　福井　好雄
上寺　福本　益夫
大才町　長谷川すゑ子
大才町　福本いくの
東鹿沢　高見まちゑ
東鹿沢　秦　文子
東鹿沢　川井　弘子
中鹿沢　小林かねを
本鹿沢　榎　一治郎
本鹿沢　下村　好子
本鹿沢　小堀しづゑ
城下　永峰長次郎
安富　三渡　正蔵
蔦沢　伊野　繁治
神崎郡　長尾　弘美

後記

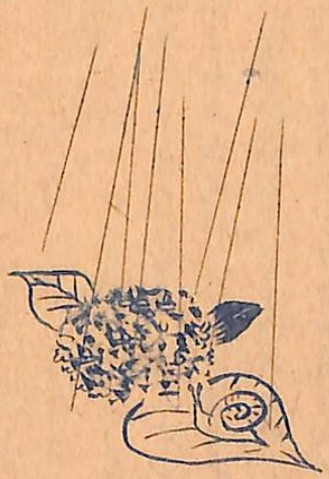
○本号発刊は、予定より二十日ばかり遅れましたことをお詫び申します。

○島田先生より、珍らしい原稿を頂いて巻頭を飾ることができました。当地縁故の「宍粟日誌」という貴重な文献による記事で、大いに興味をそそります。

○明治時代の識者、福原謙七翁について、どなたか資料お持ちの方は、一度当会報に寄稿して頂きたく、翁の門下生も大方故人になられていますので、今のうちに御紹介願いたいものです。

○地方的に貴重な本多文書も、何とか陽の目を見る日が早く来ないものかと思います。あれだけまとまつた当地の文化財は、何と云つても、かけがえのない遺産です。誰か五百万円ほど投げ出して、完全に保管出来るようになつたら……とは、夢物語のうちでしようか。

○和歌、俳句の伝統を昔から持つている当地でありますが、歌碑、句碑などは、割と少ないようです。龍野市ほど沢山なくとも、もう二、三は欲しいです。歌会の有志では、最上山に「くるくると日傘まわして葉桜の下ゆく娘あり昼の鐘なる」という当地縁故の安田青風氏歌碑でもたててはと、計画されている。



青果
海産物
食料品
各種
八百福商店
山崎町山田・電43